

# 留 学 生 通 信

## 私の台湾と日本での生活

### My School Life in Taiwan and Japan



洪 舜傑

Shun-Chieh HUNG

■2008年国立台湾大学農学部生物産業機械工程学科卒業。2009年国立清華大学(台湾)にて研究アシスタントとして研究。2010年4月東京大学大学院にて研究生、同年10月に修士課程に入学、現在に至る。

■主として行っている研究

・ヒューマノイドロボットの身体運動に基づく知能情報処理に関する研究

■通学先

東京大学情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻 修士二年生  
(〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 /  
E-mail: hungsc@ynl.t.u-tokyo.ac.jp)

## 1 はじめに

私は台湾に生まれ、16年の教育を受けた後、東京大学修士課程に進学した。現在、台湾の義務教育期間は9年であり、2014年に義務教育期間を12年に延ばすことが検討されている。1895年から日本統治時代の50年にわたり、さまざまな教育機関や教育制度がそのときの情勢に応じて定められており、そのことは日本でもよく似ているかもしれない。男性には1年の兵役義務があるため、私は国立台湾大学を卒業した後、空港で中華民国の憲兵に所属していた。そのとき、2010年パナソニックスカラシップに合格することができたので、退役後、日本に留学することができた。

来日してからすでに2年が経った。東京大学・知能機械情報学専攻の中村・高野研究室でロボットの人工知能についての研究をしている。休日には日本中を旅行し、その地の文化を体験、

勉強している。桜の美しい自由な国日本と椰子の木が生い茂る南国台湾の架け橋になれるよう、台湾で受けた教育制度や今の留学経験を紹介したいと思う。

## 2 国立台湾大学の学生生活

私の出身校である国立台湾大学は台湾にて最も権威ある大学であり、優秀な学者、政治家、科学者、エンジニアを輩出している。高校生は年1回の入学試験を受け、点数に応じて志望大学や学科を選ぶ。また、出身高校からの学校推薦や、「繁星計画」という各高校の優れた学生が優先して志望先を選ぶプログラムも設置されている。

1,2年生のときは各学科に応じた基礎科目を中心に履修し、文理を問わずに憲法や歴史なども必修科目として勉強する。3,4年生のときには専門科目を勉強し、研究室に所属して卒業論文に向けて研究に専念する。また、外国語教育や交換留学制度が完備されている



図1 大学時代のハンドボール部に所属

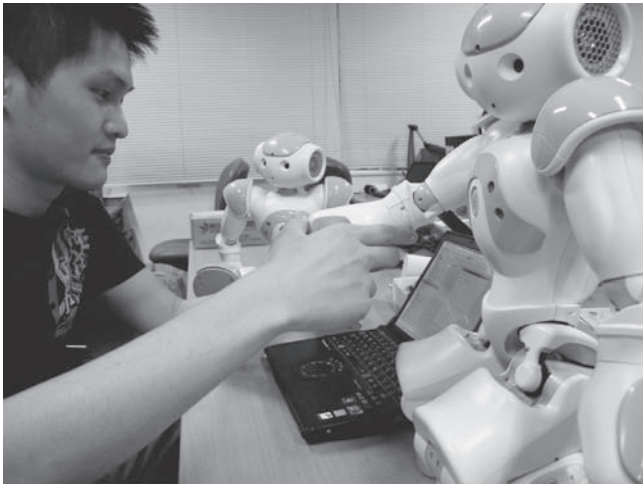


図2 小型ヒューマノイドロボットと用いた研究



図3 指導教員宅での大晦日パーティ

ので、異文化に触れる機会に恵まれている。

私の卒業論文は知能的機械魚の設計だった。先生の指導を受けながら、理論を身につけ、自分で設計し、学科の工場です試作からテストまでの一連の流れを経験することができた。この研究をきっかけにしてロボティクスの専門分野に触れ、日本の最先端ロボット理論、技術を勉強したいと思い、留学する決心をした。

台湾の大学生活は、学術的な活動だけでなく課外活動も盛んに行われている。サークル活動、学園祭、各学科の宣伝、団結力向上を目的とした1週間限定の模擬店、学科の親睦会、他大学との体育交流戦など、さまざまなイベントが催される。大学時代に私はハンドボール部に所属し、副キャプテンをしていた(図1)。部員と一生懸命に練習を続け、カレッジカップにてチャンピオンを奪い返したことを今でも誇りに思っている。

### 3 東京大学の留学生生活

2010年4月から私は東京大学に研究生として在籍し、その年の10月に修士課程に入学、中村・高野研究室に所属している。研究室では、3人の先生をはじめとして多くの研究員が中心となって、「ロボットの機構と制御」、「脳型情報処理」、「人間の体性感覚計測と推定計算」といったロボティクスに関わる研究を行っている(図2)。私はヒューマノイドロボットの身体運動に基づく知能に関する研究をしている。ヒューマノイドロボットが人間の



図4 夏休み沖縄ホームステイ先でのバナナ摘み

行動を学習、認識すること、および動作から言語を理解する情報処理の構築を目指している。単語を組み合わせて多様な表現を生み出すように、学習した動作から新たな動作を合成することで、環境に応じて柔軟に行動するロボットを創造することが最終目標である。

研究室メンバとの議論を通じて、新たなアイデアや各自の研究の視点から有益なアドバイスをいただいている。また、「人間の体性感覚計測と推定計算」の研究成果は、テレビ番組においてもよく紹介されている。スポーツ選手、音楽家の方々の動作から、そのときの筋肉の活動が身体情報として可視化できる技術を、私はいつも家でその番組を見ながら興奮している。また、研究室には多くの外国人留学生、研究員が在籍しており、英語での研究会発表、資料から研究室メンバの親切さを感じる(図3)。東京大学の授業では、先生からさまざまな先端技術や

専門理論を教えていただき、その知識の深さには尊敬の念を抱いている。ロボットの制御技術、医療ロボットの発展、人工知能の計算論、複合現実感理論など、来日してから2年間であるが、知識を広め、専門性を深めることができる素晴らしい環境である。

### 4 おわりに—これからの日本生活

私は日本に来た後、日本の文化や建築、そして自然を味わうために研究生生活のほか、北海道から九州までの日本の各地へ遊びに行った。しかも1カ月間の沖縄でのホームステイは大変貴重な経験だった(図4)。この執筆の間も、卒業のための研究、日本での就職活動に励んでいた。就職活動では、先生や友達の協力を得て就職の内定をいただいた。日本はモノづくりの誇れる国であり、今後は身につけた技術や知識を応用して社会に役立つ製品を生み出していきたいと思っている。